

俺は、いったい何を  
幸福と感じて  
生きているのだろう……。



坂上楠生画「駐輪場」(第42回)



1995年 幻冬舎

## Story

ある春の午後、一人の主婦が庭で撲殺される事件が起きる。事情聴取を受ける隣家のマンションの住人たち。その中のひとりである主人公 松野敏幸は不運にもアリバイを持たない上、妻にも言えない秘密を抱えていた。疑いをかけられた住人たちが、自らへの疑いを晴らそうとする中で、さまざまな生活や幸福の姿をあらわにする。

【産経新聞1994年5月～1995年1月連載】

## さし絵を担当された坂上楠生氏の言葉

二作目の「さし絵」の担当である。このときからの作画にあたって、輝さんから「自分の好きのように描けば…」との助言もあり、この回から自由奔放に創作表現をする事にした。画材も、水彩絵の具、日本画岩絵の具、パステル、コンテ、フェルトペン、等々、時に応じて使い分けるようにした。モチーフは小説のミステリアスな展開もあり、階段、マンション、自転車、中国陶器の壺、犬、猫、などを取り入れ創作イメージを膨らませた。このような事により多彩な挿し絵を、数多く創る事ができた。

## 人間にとって一番大切なものは何か

新聞連載も終盤に差し掛かった1995年1月17日、阪神淡路大震災が発生した。この震災での筆者の経験が作品の結末に影響を与えた。

地震の被害が日々増大していくなかで、私はこの「人間の幸福」の最終章を書き終えました。小説を書きだしたときには予定していなかった「誇りと正義」という言葉は、大震災の渦中にいた私の怒りが衝動的に書かせてしまったことになりました。

思えば、人間の幸福にとって、さして重要ではないものを、極端に言えば、かえって不必要なものを、私たちはあまりにも多く背負い込み、購買し

消費してきたようです。

そしてそれが、わずか十数秒で、ただの塵大(ほうだい)なごみと化してしまったことに、ただ呆気(あつけ)にとられていているという状態は、私自身においても当分つきそうです。

人間にとって、幸福とは何なのでしょう。

(あとがきより)

## 単なる推理小説ではありません。

みなさんは日々、どのようにお過ごしですか。  
この作品を読むと、  
自分にとっての幸せって何だろう…  
人生の目的って何だろう…  
ということを考えさせられます。  
何となく過ぎていく日常の中で、  
「考えてみる」という刺激を受けとれる  
作品です。